神さまのお返し　　オーストリア

遠い遠いむかし。

あるところに、貧しい男がいました。あるとき、男は、「神さまに物を貸すと、百倍になってもどってくる」という話を聞きました。そこで、男は、よく考えもしないで、たった一枚持っていた金貨を、教会の献金袋に入れました。

「これで、金貨を百枚もらえるぞ」

男はそう信じて疑いませんでした。ところが、とうに一年たったのに、ちっとも百枚の金貨は届きませんでした。そこで、神さまにじきじきに会って、催促しようと、出かけて行きました。

一日じゅう歩きつづけてくたびれはてたとき、男は、一軒の家にたどり着きました。そこで、一晩泊めてもらえないかと頼みました。その家の人たちは、夕ご飯の最中でしたが、

「ああ、泊めてあげるよ。いっしょにご飯を食べないか」といってくれました。男は、ありがたくテーブルに着きました。主人は、

「おまえさん、どこへ旅していくんだね」とたずねました。男は、

「神さまを訪ねていくのさ。約束の金貨を返してもらいにね」と答えました。すると、おかみさんがいいました。

「神さまのところに行くんなら、うちのこともちょっと頼んでほしいんだよ。明日、うちの娘が結婚式をあげることになってたんだけど、今日重い病気になってしまったんだ。前にも二度同じことがあって、結婚できなかったんだよ。これで三度目だよ。神さまに、うちの娘を結婚させてくださるように頼んできてくれないかい」

男は、

「ああ、聞いて来よう」と約束しました。

あくる朝、男は、うんと早く起きて出発しました。一日じゅう歩きつづけて、日が暮れたころ、一軒の家にたどり着きました。家のそばには、広いぶどう畑がありました。男が、一晩泊めてもらえないかと頼むと、その家の主人が、

「泊めてあげるよ」といってくれました。そして、

「おまえさん、どこへ旅していくんだね」とたずねました。男は、

「神さまを訪ねていくのさ。約束の金貨を返してもらいにね」と答えました。すると、主人は、いいました。

「神さまのところに行くんなら、うちのこともちょっと聞いてきてほしいんだ。うちのぶどう畑のことなんだが、このところ、さっぱりぶどうがならないんだ。どうしてなのか、聞いてきてくれないか」

男は、

「ああ、聞いて来よう」と約束しました。

あくる朝、男は、また、うんと早く起きて出発しました。一日じゅう歩きつづけて、日が暮れたころ、一軒の小屋にたどり着きました。小屋には、貧しい兄弟がふたりで暮らしていました。一晩泊めてもらえないかと頼むと、兄弟たちは、

「ああ、泊めてあげるよ」といって、水っぽいスープをごちそうしてくれました。そして、

「おまえさん、どこへ旅していくんだね」とたずねました。男は、

「神さまを訪ねていくのさ。約束の金貨を返してもらいにね」と答えました。すると、兄弟たちは、いいました。

「神さまが見つかったら、悪いけど、聞いてきておくれよ。どうしておれたち兄弟のあいだにはけんかが絶えないのか。どうしたら仲良くなれるのか」

男は、

「分かったよ。聞いて来よう」と、約束しました。

あくる朝、男は、また、うんと早く起きて出発しました。しばらく行くと、ひとりのおじいさんに会いました。おじいさんは、髪(かみ)の毛は銀色で、灰色の長いひげを生やしていました。おじいさんは、

「おまえさん、どこへ旅していくんだね」とたずねました。男は、

「神さまを訪ねていくのさ。約束の金貨を返してもらいにね」と答えました。すると、おじいさんは、いいました。

「それなら、目指すところに着いたんだ。おまえさんが探しているのは、このわしだからな」

男は、それを聞くと、ひざまずいていいました。

「あなたが神さまなら、約束してくださった百枚の金貨を返してください」

神さまは、
「安心して帰りなさい。うちに帰りつかないうちに、その百倍以上のものを手に入れるだろう」といいました。男は、飛び上がって喜びました。そして、神さまにお礼をいって帰ろうとして、旅のとちゅう、泊めてくれた家の人たちの頼みを思い出しました。そこで、みんなの願いを神さまに話すと、神さまは、すべて教えてくれました。男はますます神さまに感謝(かんしゃ)して、大急ぎで帰り道につきました。
ふたりの兄弟たちの小屋まで帰ってくると、兄弟たちは、
「神さまは見つかったかい。聞いてきてくれたかい」とたずねました。男は、
「もちろん、聞いてきたよ」と答えました。そして、
「あんたたちの仲が悪いのは、ウマが合わないからさ。別れて住めば、けんかをしなくてすむ」と教えてやりました。兄弟たちは、
「だが、おれたちは、あまりにも貧乏で、こわれかかったこの小屋しか住むところがないんだ」といいました。男は、
「おしまいまで聞いてくれ。神さまは、台所のかまどを取りこわせ、っておっしゃったぞ」といいました。
兄弟たちは、すぐさま台所のかまどをこわしました。すると、かまどの下に、ばかでかいつぼがあって、その中に、金貨がぎっしりつまっていました。兄弟は大喜びして、お礼に、持てないくらいたくさんの金貨を男にくれました。それからふたりは、金貨を分けて、それぞれ別の家で暮らすことにしました。
男は、あくる日、ほくほく顔で、旅をつづけました。
やがて、広いぶどう畑のある家まで帰ってきました。主人は、
「神さまは見つかったかい。聞いてきてくれたかい」とたずねました。男は、
「もちろん、聞いてきたよ」と答えました。そして、
「以前は、あなたのぶどう畑の周りのさくは、低かった。それで、旅人はだれでもぶどうをつまんで元気になれた。だから、神さまは、あなたのぶどう畑を祝福(しゅくふく)してくれてたんだ。ところが、あなたは、ぶどう畑を高い高いさくで囲ってしまった。もう小鳥だってつまみ食いができないほどだ。さくを元どおりにすれば、神さまはまた祝福してくださって、ぶどうはたくさん実るそうだよ」と教えてやりました。主人は、自分のあやまちをさとり、男にお礼をいって、たくさんのお金をくれました。

男は、あくる日、また旅をつづけました。
やがて、娘が病気になった家まで帰ってきました。主人夫婦は、
「神さまは見つかったかい。聞いてきてくれたかい」とたずねました。男は、
「もちろん、聞いてきたよ」と答えました。そして、
「あなたたちは、娘さんがまだ幼(おさな)かったころ、神さまに仕えさせようと決めたのじゃなかったかい。それなのに、娘が大きくなっても修道院(しゅうどういん)に入れないで、結婚させようとしている。娘が元気でいてほしいのなら、神さまとの約束通りにするんだな。そうすれば、あんたたちの家を祝福してくださるそうだよ」と教えてやりました。主人夫婦は、自分たちのあやまちをさとり、男にお礼をいって、たくさんのお金をくれました。
こうして男は金貨一枚に対して、百倍どころか、千倍もお返しをもらいました。男は、そのお金を半分、家族のもとに送りました。そして、もっと世間を見て回ろうと思って、家には帰らずに、旅を続けました。
ある日、男は、すばらしくきれいな庭の前に出ました。美しい花をながめようと近づいていくと、庭師が、ひどいやり方で木を切っていました。男は、思わず笑(わら)ってしまいました。すると、庭の持ち主の伯爵(はくしゃく)が聞きつけて、
「おまえは、どうして笑っているのか」と聞きました。男は、
「これが笑わずにいられますか。せっかくの美しい木を、あんなふうに不器用(ぶきよう)に切っているんですから」と答えました。
「おまえのほうが、腕(うで)がいいというのか」
「もちろん。だてに年は取っていませんよ」
「では、こっちに来て、おまえの腕を見せてみろ」
男は、庭に招き入れられると、さっそく、はさみで木をあざやかに切りました。伯爵は、目を丸くして、
「おまえ、ここで庭の世話をする気はないか」といいました。男は、
「かまいませんよ。ちゃんとお手当がいただけるなら」と答えました。
こうして、男は、伯爵の屋敷(やしき)で庭師として働くことになりました。男が仕事をすればするほど、庭は美しくなっていきました。伯爵はたいそう喜び、男も幸せでした。
ところが、そのうち、男は家に帰って家族やふるさとの人たちに会いたくなりました。
そこで、伯爵に、

「そろそろ家に帰りたいので、これまでのお手当(てあて)をください」といいました。伯爵は、男を手放したくありませんでした。いくら引き留めても、男の決心が変わらないので、伯爵は腹を立てていいました。

「どうしてもいうのなら、勝手に行ってしまえ。手当には、三つの教えしかやれん。ひとつ目は、分かれ道に来たら古い道を行け。二つ目は、泊めてもらった家で、あれこれものが置いてあっても、そのわけを聞くな。三つめは、何事も、かっとなってすぐに行動するんじゃない」

男は、これはりっぱなお手当だと思って、荷物をまとめて出ていこうとしました。すると、伯爵が、大きなケーキをひとつくれて、

「記念に、このケーキをやろう。ただし、このケーキは、おまえが一番うれしいときにしか切るんじゃないぞ」といいました。

男はお礼をいって、旅立ちました。

たいして行かないうちに、りっぱな馬車が追いついてきました。馬車に乗っていた紳士(しんし)が、男に、

「乗って行かないか」と声をかけてくれました。男は、喜んで、馬車に乗せてもらいました。

やがて分かれ道まで来ると、馬車は新しい道に行きかけました。男は、伯爵のひとつ目の教えを思い出しました。

分かれ道に来たら古い道を行け

そこで、男は、馬車を降り、ひとりで古い道を歩いて行きました。ずいぶん歩いて、村の四つ辻(つじ)まで来たとき、あたらしい道のほうから、馬が一頭、すごい勢いで走ってきました。男は、何事かと思って、村の人たちといっしょに見に行きました。すると、あの紳士が大けがをして倒れていました。馬車が追いはぎにあって、御者(ぎょしゃ)が殺され、何もかも盗(ぬす)まれたというのです。男は命が助かって、伯爵の教えを守ったことを神さまに感謝しました。

男は、旅を続けました。やがて、宿屋が一軒、ぽつんと建っていました。男はそこに泊まることにしました。ところが、ふと窓(まど)の外に目をやると、中庭に、人間の腕や、手や、足が落ちているのが見えました。男はびっくりぎょうてんして、宿屋の亭主(ていしゅ)に、「あれはどういうわけか」と聞こうとしました。けれども、すんでのところで、伯爵の二つ

目の教えを思い出しました。
泊めてもらった家で、あれこれものが置いてあっても、そのわけを聞くな
男は、黙ってベッドに入りましたが、恐ろしくて、一晩じゅう、まんじりともできませんでした。あくる朝、早々と起きて、勘定をはらおうとすると、亭主が、
「あんた、中庭の人間の手足のことをふしぎに思わなかったのかい。どうして何も聞かないんだ」とききました。男は、
「おれは、自分にかかわりのないことを聞くのは性に合わないんでね」と答えました。すると、亭主はいいました。
「それはよかった。もしおまえさんが聞いていたら、おまえさんも手か足を一本、あそこへ残すはめになっていたからね」
男は、また、伯爵の教えを守ったことを神さまに感謝しました。そして、急いで旅をつづけました。
ようやく故郷の村に着くと、男は、わが家の前の居酒屋に寄って一服しました。テーブルについて窓から見ていると、若い司祭がわが家に入って行くのが見えました。そして、おどろいたことに、自分の妻が司祭を抱きしめているではありませんか。男は、飛び上がって、ふたりをぶちのめしに行こうとしました。そのとき、伯爵の三つ目の教えを思い出しました。
何事も、かっとなってすぐに行動するんじゃない
男は、居酒屋の主人に、あの若い司祭は何者かとたずねました。主人は、
「あれは、あの家の息子ですよ。司祭になったばかりで、あした初めてミサをするんです。それで、あしたは、村人みんなでお祝いをするんですよ。父親は出かけて行ったきりで帰って来ないんですがね」といいました。男は、若い司祭が自分の息子だと知って、喜びました。そして、伯爵の教えを守ったことを神さまに心の底から感謝しました。
あくる日、教会で、ミサがおごそかに行われました。ミサが終わると、村人たちは、居酒屋に集まり、新しい司祭とその母親を囲んで、にぎやかに食べたり飲んだりしました。男も、そのなかに混じってテーブルについていました。みんなは、新しい司祭を祝って、万歳を唱えました。そのとき、男は、とつぜん、立ち上がっていいました。
「よくやってくれた、妻よ。よくやった、息子よ。みなさん、今日のおめでたい日に、司祭の父親のことをすっかり忘れていませんか。だれもわたしがだれだか分からないの

ですか」

司祭と母親は、飛び上がって、男に抱きつきました。

男は、

「今こそ、おれの一生で、一番うれしいときだ」と思いました。そこで、伯爵からもらったケーキをテーブルに出して、ナイフを入れました。ケーキは硬(かた)くて、やっとのことで半分に割れました。すると、ケーキの中から、数えきれないほどの金貨がこぼれ出てきました。男はおどろいて、いいました。

「みんな、見てくれ。神さまに貸しておいたものを、神さまはこんなふうに返してくれるんだ」

村上郁再話

資料『世界の民話28オーストリア』飯豊道夫訳／ぎょうせい